よさこいの「踊り子」の技芸とフォト・エスノグラフィー

大阪市立大学
ケイン樹里安

1．研究目的

よさこいの踊り子はカメラに撮られる被写体である。だが、同時に彼ら・彼女らは「踊り子である」日々を自らフレームにおさめる撮影者でもある。映像文化と共にある/共にあらざるをえない踊り子たちの日常的実践から、よさこい踊りについて「語り直す」ことはできないだろうか。

よさこいはこれまで、全国に伝播拡大した都市祭礼という側面やヤンキー文化という視角、はたまたナショナリズムと共振する文化的営為として捉えられる一方で、その主たる担い手である踊り子の文化実践を裏打ちする「美学」や「美的実践」（Fine 1996=2000）、そして、それらを可能にするとともに束縛もしうるメディアを介した「つながりっぱなしの日常」（Boyd 2014=2014）が遍在化/遍在化した社会状況との連関については後景化されてきた。本報告の目的は、よさこい踊りという人々の眼前で繰り広げられる身体文化実践を生み出す技芸や美学に迫る試みとして、フォト・エスノグラフィーというビジュアル調査法を実施し、その可能性を探求することにある。

2．方法

関西を中心として活動する踊り子たちを対象として、彼ら・彼女らが、いかにしてよさこい踊りを取り巻く映像文化に関わっていくのか、そして関わらざるをえないのかについて、参与観察とインタビュー、そして、なかでもフォト・エスノグラフィーというビジュアル調査法を採用することで迫る。フォト・エスノグラフィーとは、複数の静止画像を集合させ、論理的に配列させたエスノグラフィーであり，フィールドで撮影した写真を分類し、比較し、パワーポイント等のプレゼンテーション用ソフトを用いて時間空間的な秩序づけや必要に応じた編集作業を行うことで、組み写真の要領で社会的現実を再構成する成果物のことであり、それを制作するために行われる参与観察法のことである（岩谷 2016）.

3．結果・結論

人々の記憶・感情・情報を喚起し，画面に写り込まない社会的文脈をも想起させるメディアである写真を活用するフォト・エスノグラフィーは、よさこい踊りの主たる担い手である踊り子の技芸と美学をありありと視角化する可能性をもつ。調査者を含めた人々の「アート」に批判的な社会学的実践を展望するための、1 つの手がかりを示唆したい。

【参考文献】

長谷正人，2016,『映像文化の社会学』有斐閣.

Fine, Gary Alan, 1996, *Kitchins: The Culture of Restaurant Work*, The Regents of University California.（＝2000，藤澤美枝子・小池久恵・谷林眞理子訳『キッチン――レストランの文化誌』法政大学出版局）.

Boyd, Danah, 2014, It's Complicated: The Social Lives of Networked teens, Yale University Press.（＝2014, 野中モモ訳『つながりっぱなしの日常を生きる――ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』草思社.

岩谷洋史，2016,「フォト・エスノグラフィー――写真の組み合わせによる現実の再構成」『FENICS100 万人のフィールドワーカーシリーズ第 14 巻フィールド写真術』古今書院，240-8.